

# コロナ関連の相談急増

## 生活や将来不安訴え

### 大分いのちの電話

悩んでいる人の心よりどころになっている社会福祉法人「大分いのちの電話」(大分市)で新型コロナウイルス関連の相談が増えている。感染への懸念からボランティア相談員の活動も制限されているが、法人は「不安な人の気持ちに少しでも寄り添いたい」としている。

### 自粛生活で相談員不足

「暗い社会が続くなら生きていても仕方がない」

法人によると、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、緊急事態宣言が全国に拡大された4月以降、日々の生活や将来への不安を訴える相談が相次ぐようになった。新型コロナ関連の相談は2月が10件、3月が27件だったが、4月は58件に上った。勝谷斉事務局長(68)は「5月は中旬までに84件寄せられ、急増している」と話す。

県内の相談員はピーク時の1998年には225人いたが、現在は実習中を含めて141人。約9割が50歳以上で高齢化も進んでおり、今回はさらに感染への懸念も加わり、活動を自粛せざるをえない相談員もいるという。

大分いのちの電話は、365日24時間、相談を受け付けている。事務所には2本の電話回線があるが、人線りができない場合は1人で対応するため、電話がつながりにくいこともあるという。勝谷事務局長は「生活の不安を感じる人が増えている時だからこそ、相談員みんなで力を合わせ丁寧な対応をしていきたい」と話している。



専用電話＝097・536・4343

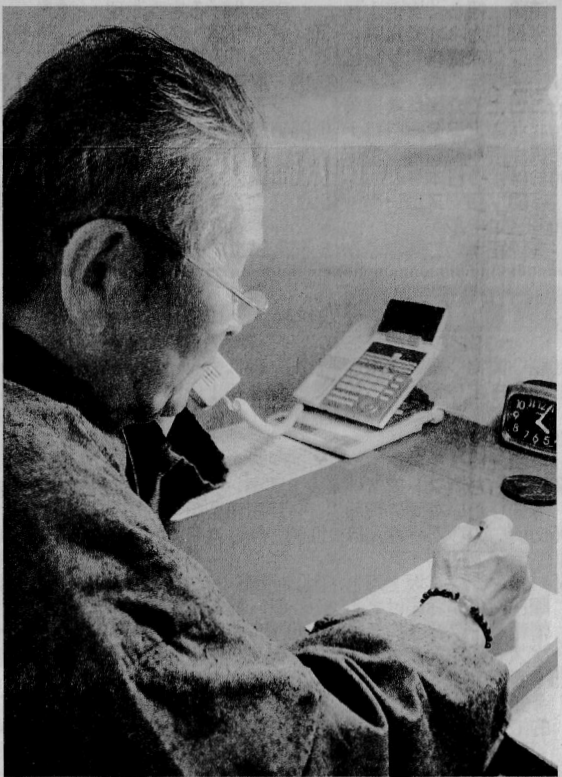
悩みに寄り添う「大分いのちの電話」の相談員

感染拡大は、ボランティア相談員にも影を落とす。「一本でも多くの電話を取りたいが、着信が集中して対応しきれない時もある」。相談員歴30年以上の女性(70歳代)は語る。

家族がずっと家にいて「疲れた」

子や孫の来訪なく「孤独死不安」

新型コロナウイルスに関連した悩み相談が相次いでいる大分いのちの電話



## いのちの電話、相談増

応を続けたい」と話している。

5月は18日時点の集計で84件。全体(400件)の2割を占めた。相談を休止している他県の「いのちの電話」もあるため、県外からかけてくる人もいるという。

大分合同新聞  
6月1日

## 新型 コロナ

事務局によると、3月は全体の相談837件のうち、新型コロナに関する内容は27件だった。4月は全体(698件)の1割近い58件に急増した。

政府は緊急事態宣言を5

月25日に全面解除した。日常を取り戻すには時間がかかるものの、勝谷齊事務局長(68)は「少しでも状況が改善してほしい」と話した。

大分いのちの電話はボランティア約140人が登録し、交代で電話を受けている。4月以降は体調に不安がある人に休んでもらい、約120人で対応している。

自殺防止のため24時間休

制で電話相談に応じる「大

分いのちの電話」(大分市)

に、新型コロナウイルスに

関連した悩みが相次いで寄

せられている。配偶者や子

どもが家にいる時間が増

え、「疲れた」との訴えが

目立つ。離れて暮らす子や

孫の来訪がなくなり、孤独

死を不安視する高齢者も。

事務局は「孤立感を深めて

いる人が多い。寄り添う対

応を続けたい」と話している。

事務局によると、3月は全体の相談837件のうち、新型コロナに関する内容は27件だった。4月は全体(698件)の1割近い58件に急増した。

当初は「これからどうなるのか」「国・県の対応はこれでいいのか」と感染拡大に対する不安の声が大半だった。4月16日に緊急事態宣言が全都道府県に拡大して以降は、家族がずっと家にいることへのストレス、解雇や収入源を心配する人が多くなった。「持病があり、感染するより死んだ方がましだ」と話す高齢者もいたという。

(大塩信)